はじめてのクロダイ・チヌ釣り

スタイル3

永易啓裕の紀州釣り入門

紀州釣りは、ウキでアタリを取るダンゴ釣り。磯や堤防で磯竿と小型スピニングリールを使い、付けエサをダンゴに包んでポイントへ投入します。エサ取りが集まる中、いかにクロダイ・チヌを仕留めるかを楽しむ頭脳ゲームです。

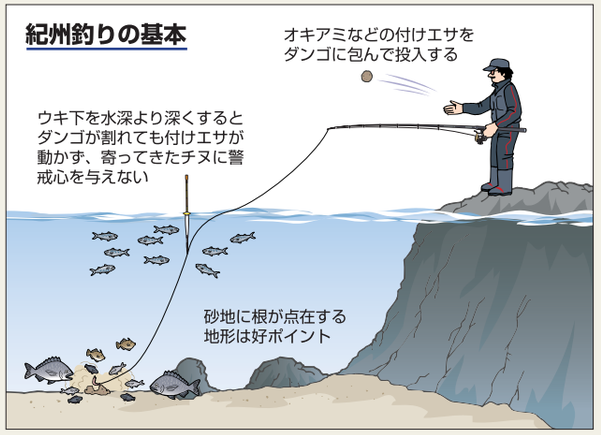
ダンゴを投入し、クロダイ・チヌが潜むポイントに付けエサを送り届けて食わせます。自分の思惑通りだと最高のゲームになるでしょう。それが紀州釣りの楽しさなのです。

レクチャー1 紀州釣りとは?

ダンゴに付けエサを包んで投入 ウキ下は水深以上に設定しよう

紀州釣りは、オキアミなどの付けエサをダンゴに包んでしっかり握り、ポイントへ投入するという釣りです。着底し、ダンゴが割れたら、付けエサが出てクロダイ・チヌが食い、水面のウキに伝わるというメカニズムになっています。フィールドは堤防や磯。水深6～7mくらいで砂地に根が点在するような地形なら紀州釣りに最適です。オールシーズン狙えますが、水温が上昇しエサ取りが多くなる春から秋に威力を発揮する釣り方です。

ウキ下（タナ）を水深より浅くすると、ダンゴが割れたあと、付けエサがウキの浮力で浮き上がります。これはクロダイ・チヌを驚かせ違和感を与えることになるので、ウキ下は水深より深く取る方が結果として食いがよくなる傾向にあります。



これを”ハワセ“といい、エサ取りが多い現代の紀州釣りでは釣法のひとつとして認知されるようになってきました。ダンゴの割れがウキに出にくいので最初はとっつきにくいかもしれませんが、まず1ヒロ、2ヒロとハワセてみることから始めましょう。

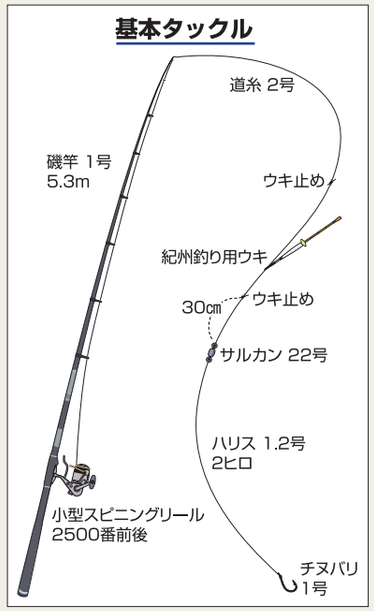
付けエサをダンゴに包み投入します。

レクチャー2 タックル&仕掛け

磯竿1号に小型スピニングリール 棒ウキ使って大きめのアタリ取る

竿は磯竿の1号前後で長さは5・3mを目安にするとよいでしょう。堤防であれば足元に障害物がなく根ズレの心配もないので4・5mでもOKですが、長めの方が大物が掛かったときに楽にやり取りできます。これに2500番前後の小型スピニングリールをセットします。道糸は2号。一般的には潮や風を考慮して、海面に浮くフローティングタイプと少し沈んで海中にとどまるサスペンドタイプを使い分けますが、流れ、風がないときにはフローティングタイプを選びます。

紀州釣りで使われるウキには主に棒ウキと玉ウキがあります。棒ウキは浮力が小さめで、アタリは比較的大きく出ます。玉ウキは浮力が大きくアタリは小さめですが、ダンゴが割れたのを視認しやすいという長所があります。ビギナーにはアタリがとりやすい棒ウキがおすすめです。ダンゴが割れるのに1分程度かかると仮定し攻めていきましょう。ウキ下の設定はあとで述べていきます。



レクチャー3 付けエサの使い分け

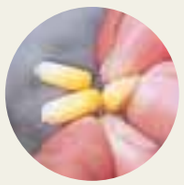
オキアミでスタートし 3種類で臨機に対応する

付けエサは、オキアミ、コーン、ボケ（ジャコ）の3種類あればOKです。一番最初はオキアミでスタートし、エサ取りに取られるかどうか様子を見ます。オキアミが残ってくるようならそのままオキアミで、取られるようであればボケかコーンに替えましょう。コーンはオキアミがよく取られるときの絶好の代打です。ボケは、オキアミがよく取られて、チヌが食ってきそうなタイミングで使うと効果的です。

◀ボケ

ボケはできるだけ小さいものを選びます。一部の地方では小ボケを選んで購入できるところもあります。刺し方は通し刺しです。

◀くわせコーン



コーンはオキアミとともに紀州釣り必携の付けエサです。エサ取りが多いときに効果的です。3～4粒ハリに刺します。

◀くわせオキアミV9

生より加工されたものの方がエサ取り対策やクロダイ・チヌの食いという点から有利です。目の間からハリを入れ尾に抜きます。

レクチャー 4

ダンゴをつくろう

「紀州マッハ」は心強いベースエサ 水深で「紀州マッハ攻め深場」と使い分ける

ダンゴはエサ取りから付けエサを守り、ダンゴに群がるエサ取りに興味を示して寄ってきたクロダイ・チヌにタイミングよく食わせるという重要な役割をします。クロダイ・チヌが接近するまでは割れないようなダンゴ作りが大事だといえるでしょう。ダンゴのベースは「紀州マッハ攻め深場」。あまり水深がない磯や堤防ならベーシックな「紀州マッハ」でOKです。これに「細びきさなぎ」半袋、アミエビ200cc、水400cc、押しムギ少々を加えるとまとまりやすく割れるタイミングをコントロールしやすいダンゴが手軽に作れます。理想的なダンゴに仕上げるためには計量カップなどで正確に水量を計るのが重要です。紀州釣りのダンゴはしっかり握り込むことが大切です。個々の力によっても違いますが、力を込めて30回ほど、ダンゴの弾力がなくなり、カチッとまとまるまで押し込んでください。握り込んで付けエサがつぶれても食いに影響はありません。

「丸型パワーバッカン」を使うと混ぜるときに一定の円を描けるのでダンゴ作りが早く楽になります。握ったダンゴを一時置くのに便利な「ダンゴテーブル」(PAT.P)付きです。

紀州釣りに欠かせないのが「紀州マッハ」シリーズと「細びきさなぎ」です。

作り方の手順

ていねいに混ぜ合わせカチッとしたダンゴを握る

1 バッカンにベースエサの「紀州マッハ攻め深場」を1袋入れます。

2 ベースエサの上に「細びきさなぎ」を半袋乗せましょう。

3 「細びきさなぎ」にアミエビを1カップ(カップは200cc)乗せます。

4 両手ですりつぶす感じで「細びきさなぎ」とアミエビを混ぜます。

5 手のひらですくうようにベースエサ全体を混ぜましょう。

6 全体を混ぜ終わったら水を2カップ入れます。

7 水分が全体に行き渡るようにまんべんなく混ぜ合わせましょう。

8 最後に押しムギを半カップくらい入れます。

9 まんべんなく混ぜ合わせてダンゴの完成です。

ダンゴの握り方

1 ダンゴの材料を右手に取り、まん中に付けエサを入れます。

2 ダンゴを握ります。右手で受け体重を乗せ左手で押し込みます。

3 ダンゴに弾力がなくなりカチッとするまで押し込んで完成です。硬さの目安として1mほどの高さから落下させヒビが入る程度です。

レクチャー5

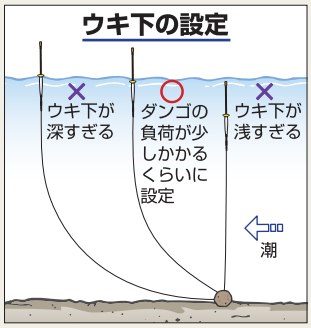
攻め方の基本

水深+2ヒロの範囲でウキ下設定 ダンゴ近くに付けエサを止める

ダンゴが割れても付けエサを一点に止めておくことが大切です。ウキ下を余分に取っておかないと、潮流に道糸やハリスを持っていかれ、興味を持ってダンゴに近づいてきたクロダイ・チヌから付けエサを遠ざけることになり、よくありません。潮が流れていてもウキが完全に沈まずダンゴの負荷が少しかかるウキ下に設定しましょう。速くない流れなら水深プラス2ヒロくらいまでの範囲です。ポイントは磯なら足元の根を避け10mくらい沖のシモリ（根）際の砂底を狙います。投げ方は野球のように手首のスナップを効かせず手のひらを押し出すようにします。

ポイントは砂地とシモリの境目あたりに設定します。投入距離は10mくらい。スナップは効かさず下手投げでトライしましょう。

竿先は投げる方へ向けリールのベールをオープンにします。仕掛けがたるむくらい道糸を出しスプールを指で押さえ、投げた直後に指を離します。下手投げが楽でしょう。

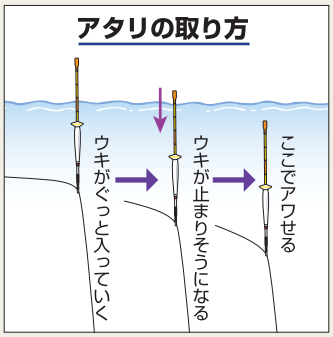


レクチャー6

アタリの取り方

ウキがグッと入り停止するタイミングでアワセていく

アタリは、ウキがグッと入ってそのスピードがゆるみ、止まるかなというところでアワセましょう。ウキのトップが水面下に入らなくてもかまいません。チョンチョンと引いてすぐ戻ってくるようなアタリはアワセてはダメです。



レクチャー7

アワセ→やり取り→取り込み

着底1分後からアタリに備える アワセは顔の横で竿振り止める

エサ取りの状況でダンゴが割れる時間は変わります。かっちり握ったダンゴで普通にエサ取りがいれば1分くらいでダンゴが割れていると考え、着底1分後からはいつでもアワセられるようアタリに備えましょう。もし2分たってもアタリがなければ仕掛けを回収し付けエサを確認します。このときアタリがないまま付けエサを取られているようなら、ウキ下を浅めに変更します。アタリが出るまで地道にタナを詰めていくのです。

ウキが入ったら、レクチャー6で述べたようにアワセるタイミングを待ちます。アワセは竿を大きく鋭く起こしますが、振り抜いてはいけません。振り抜くとトラブルの元になるので顔の横で止まるように振り止めしましょう。

やり取りは、魚にのされないよう竿の弾力を活かし、竿尻を魚に向けるくらいの気持ちで取り込みます。さし出したタモの直前で道糸をゆるめると魚がタモへ入ってくれます。

やり取りは竿尻を魚に向ける感じで、タモ入れは魚がタモに入る直前に道糸をゆるめるとクロダイ・チヌの方から勝手にタモに入ってくれます。

海底の状況を推理しながら手にしたクロダイ・チヌは、やはりうれしいものです。しっかりしたダンゴを作れば、連続ヒットも決してむずかしくはないのです。

プロフィール
ながやす・けいゆ
1965年生まれ。大阪府東大阪市在住。18歳から紀州釣りを始める。紀州釣りの本場である和歌山県湯浅に通い詰めてチヌ釣りの技術を磨く。へら鮒釣りも得意。紀州釣りクラブ、FREEDOM会長。